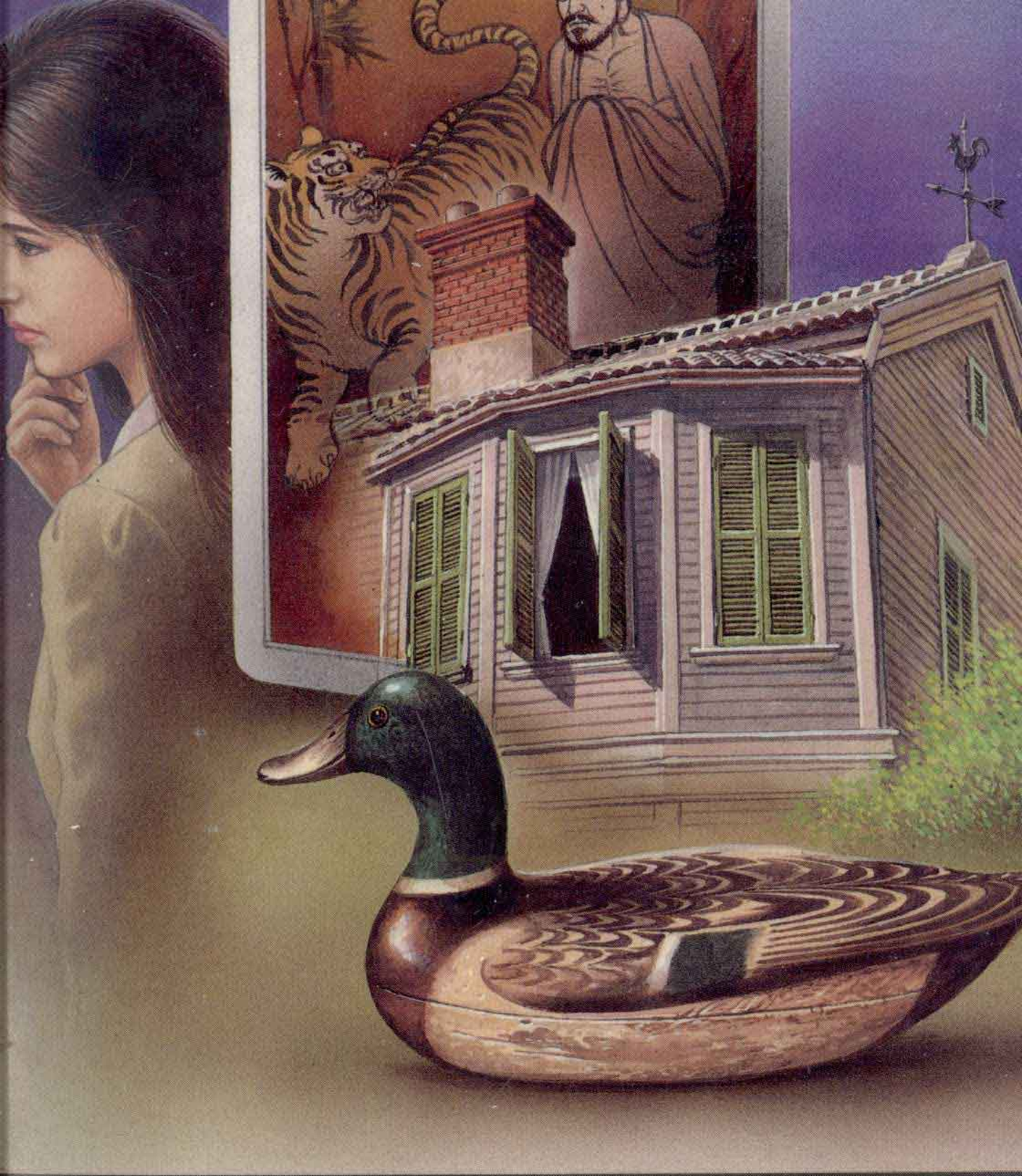


KAPPA NOVELS

長編推理小説

二階堂警部の復讐

殺人トラベルトリック

斎藤 栄

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、「カッパ・ノベルス」にかぎらず、最近、どんな小説を読まれたでしょうか。また、今後、どんな小説をお読みになりたいでしょうか。読みたい作家の名前もお書きくわえいただけませんか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
(〒112-11)
光文社 出版局

長編推理小説　二階堂警部の復讐（ふくしゅう）

1991年6月30日　初版1刷発行

著者　斎藤（さいとう）栄（さかえ）
発行者　大坪昌夫
印刷者　盛庄吉
東京都文京区水道2—4—26
慶昌堂印刷

発行所　東京都文京区音羽2　株式会社 光文社
振替　東京6-115347　電話 東京(3942)2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　(模本製本)
表紙の模様・意匠登録　116613
© Sakae Saitō 1991

ISBN4-334-02927-2
Printed in Japan

長編推理小説

二階堂警部の復讐

——殺人トラベルトリック——

斎藤 栄

カッパ・ノベルス

目次

第一章　流　産　5
第二章　マイカル本牧殺人　22
第三章　柏木陽一イン・ジャパン　39
第四章　白いマスクの女　60
第五章　陽一の行方　73
第六章　〈風見鶏〉　89
第七章　神戸の女　106
第八章　美術評論家　123
第九章　影の女の正体　139
第十章　引っ越し　156
第十一章　タロット占い　173
終　章　華ある生命　190

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

本文イラストレーション／加藤（かとう）　孝雄（たかお）

第一章　流　産

1

ハワイは曇っており、時折り、驟雨性の雨が降っている。

オアフ島の海岸べりにあるクランシン総合病院の、白い外壁に、線を描いたようなシミの模様が目にはいった。

この病院の脳外科主任部長となった柏木陽一医学博士は、部長室の窓際に立って、じっと、そのシミを見ていた。

その雨のシミの形は、ピック病にかかった患者の前頭葉が萎縮したようなふうに見えた。

柏木医博は、この病院に来てからは、ずっと、ピック病の研究と治療をしている毎日だ。

ピック病というのは、アルツハイマー病と並んで、老人性痴呆症の中では、特異な病気とされている。

このピック病にかかる患者は、ほとんど五十歳代の初老期である。この病気にかかると性格が変化してしまい、失語症になったりする。

ただ、患者数は少ないものの、五十歳代に発病するので、社会的に活躍中の人物が、突然、廃人同様になるという悲惨な事態をひきおこす。

実は、クランシン総合病院のトーマス・C院長も、昨年、この病気にかかり、現在、入院しているのだった。

そこで、柏木は、新たに脳外科主任部長に就任するとき、病院の理事会の名で、
「是非とも、本病気の治療について、決定的な方法を開発してほしい」
と、要望されているのだった。
それというのも、現在、この病気の治療は、対症療法しかなく、予防としては、禁酒とか過労防止が考えられる程度のものなのだ。
実は、クランシン総合病院の医者の中には、
「もしかすると、これはウイルスによる感染病ではないか」
という者があって、関心は高かった。
これに対して、柏木は、
〈これは免疫不全症候群のひとつとして、発現するのではないか〉
と疑っていた。
つまり、エイズなどと同様の病気の疑いがあった。
しかし、これを立証するには、なんとしても、研究対象の症例が少ないのが問題だった。
窓外に見える雨のシミは、徐々に形をかえていった。
〈……あの萎縮する前頭葉や側頭葉に活性を与えることができれば、治せるわけだが……〉
と考えた。
小雨は、いつしか降りやんでいた。

2

部屋のドアをノックする者があった。
「鈴原(すずはら)です。よろしいですか？」
と、日本語で言った。
それは、副主任部長の鈴原善之(よしゆき)だった。
鈴原は、そのポストについて六年目になる。彼は、アルツハイマー病の研究者として頭角を現わしてき

た。
アルツハイマー病は、ピック病によく似ている。これは、アルツハイマー細線維変化が解剖的に見られるし、てんかん様発作を伴うことが特徴になっていた。
鈴原は、この治療法として、脳に対する部分移植をすべきだと主張して、個人的に、日本ザルの脳移植を実験してみていた。
「ああ、丁度よかった。今、ひと息、入れていたところだから……」
と、柏木は答えた。
鈴原は、背は低いが、筋肉質で、毎日、ジムに通って、体力トレーニングをしている。それというのも、
「外科医に必要なのは、知力よりも体力なのだ」
という信念があったからだ。
四時間、五時間という……いや、もっとそれより長時間にわたって、人の生命と格闘し、細かくて、困難な外科手術を成功させるには、どうしても、超人的な体力が要るのである。
これには、柏木も賛成だった。彼も、時折り、ジムには行くが、普通は、自分の住む三軒のコンドミニアムのうち、一軒にあるプールで、毎晩、泳いで体力をつけている。
「何をご覧になっていたんですか？」
と、鈴原は怪しむように、窓際にいた柏木に訊いた。
「いや、なんでもない。つまらないことだ」
と、柏木は答えた。三十歳を出たばかりのこの医者の頬がピクピクと震えた。
「そんなことより、おれが日本へ行った後、院長のことはよろしくたのむよ。だいぶ、おかしくなっているから」
と、言った。

「分かっています。昨日も、病院経営のことで、婦長を困らせたそうですね」
「そうだよ。自分じゃ、現役のつもりでいる。患者となって入院中の身なのに……」
「院内のアメリカ人の医者の中には、院長がおかしいのをいいことにして、自分達に都合のいいような経営をしようと考えている者がいるようです」
と、鈴原は言った。
「そいつが困るんだ。それに……おれは今回、日本へ極秘で行くわけだから、事情を知っている者は事務局長のほか、数人しかいない。一番心配しているのは、なん日に日本から帰れるか、そのメドがたたないことなんでね」
「いや、主任に、そんな心配をおかけすることはないですよ。ちゃんとやります。主任は、鎌倉のお宅へ立ち寄られるのでしょう？」
「そうしたいと思っているが……。妹の日美子がおめでたの躰だというから……。このところ、会っていないので、ひと目、様子を見てきてやりたい」
「それがいいですよ」
「ところが、日本でうまく、ピックの患者に会えるか……その方が心配なんだ」
「献体したいと申し出ているわけですか？」
と、鈴原が訊いた。
「うん。危篤寸前の躰だというし……遺族が神戸の人間だから、そっちへ行く必要もあると思う。すべては、東京で会う弁護士がカギをにぎっているんだ。国際的な問題もある。遺体運搬となるよりも、生きているうちに、なんとか、〈手術〉を名目として、こっちへ運びたいんだが……」
「成功するとよろしいですね」
「うむ。……ところで用件は？」
と、柏木はあらためて訊いた。
鈴原はハッと我にかえったように、

「あ、それは……こっちへ戻られる日を、伺っておかなくては、と思ったんです。しかし、今のお話で分かりました。それだと、いつ帰れるか、現在、不明ですね。弁護士に会わない限り……」

と、軽く頷いて言った。

「うん。弁護士だけではダメだろうね。神戸の親族……いや、そのときは、もう遺族になっているかもしれない」

と、柏木は言った。

「息のあるうちに、話をつけて、こっちへ搬送すれば、厄介な問題にならないわけですからね」

「そうなんだ、ま、運を天にまかせて行ってくるよ」

「分かりました」

と、鈴原は頭をさげた。

彼は、入室したときと同じように、風の如く、飄飄として去っていった。この脳外科には、もう一人、副主任部長がいる。ヨハネス・カイゼルといい、ドイツ系アメリカ人である。このカイゼルも、なかなか腕のいい外科医だった。

一般的な脳外科手術は、このカイゼルにまかせておいて、ほとんど支障がないくらいだった。

〈とにかく、おれは、理事会の期待に応えるためにも、ピック病の正体に一歩でも二歩でも迫ってみないことには……〉

と、柏木は思った。

このところ、日本へも帰っていない。

この仕事のついでに、妹の日美子に会いたいのは事実だった。日美子の夫、二階堂警部も、気風のいい男だ。日美子が妊娠四カ月になっているという話だから、きっと喜んでいるはずだ。

〈……今度こそ、うまくいい子を産んでくれればいいが……〉

と、柏木は思った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

3

〈嬉しいわ。……この子こそ、本当に私の子になるんだわ……〉

日美子は、産婦人科医の甲賀医博に、

「おめでとう。立派な赤ちゃんを産みなさいよ」

と言われたとき、心の底から喜んだのであった。

鎌倉の〈江ノ電〉和田塚の駅に近いところで開業している甲賀は、〈お産の名医〉として全国的に知られていた。

日美子は、習慣性の流産に悩まされていた。こうした女性には、甲賀は神様みたいな人物だったのである。

彼女が、名声を聞いて訪ねたとき、八十二歳……日本で最長老の産婦人科現役の医者は、キッパリ言った。

「私の言う通りにしていれば、必ず産めますよ」

と。

甲賀は頑固だが、慈愛に満ちた目つきの老人だった。

その処方の第一は、

「とにかく、小豆入りの玄米食にしなさい」

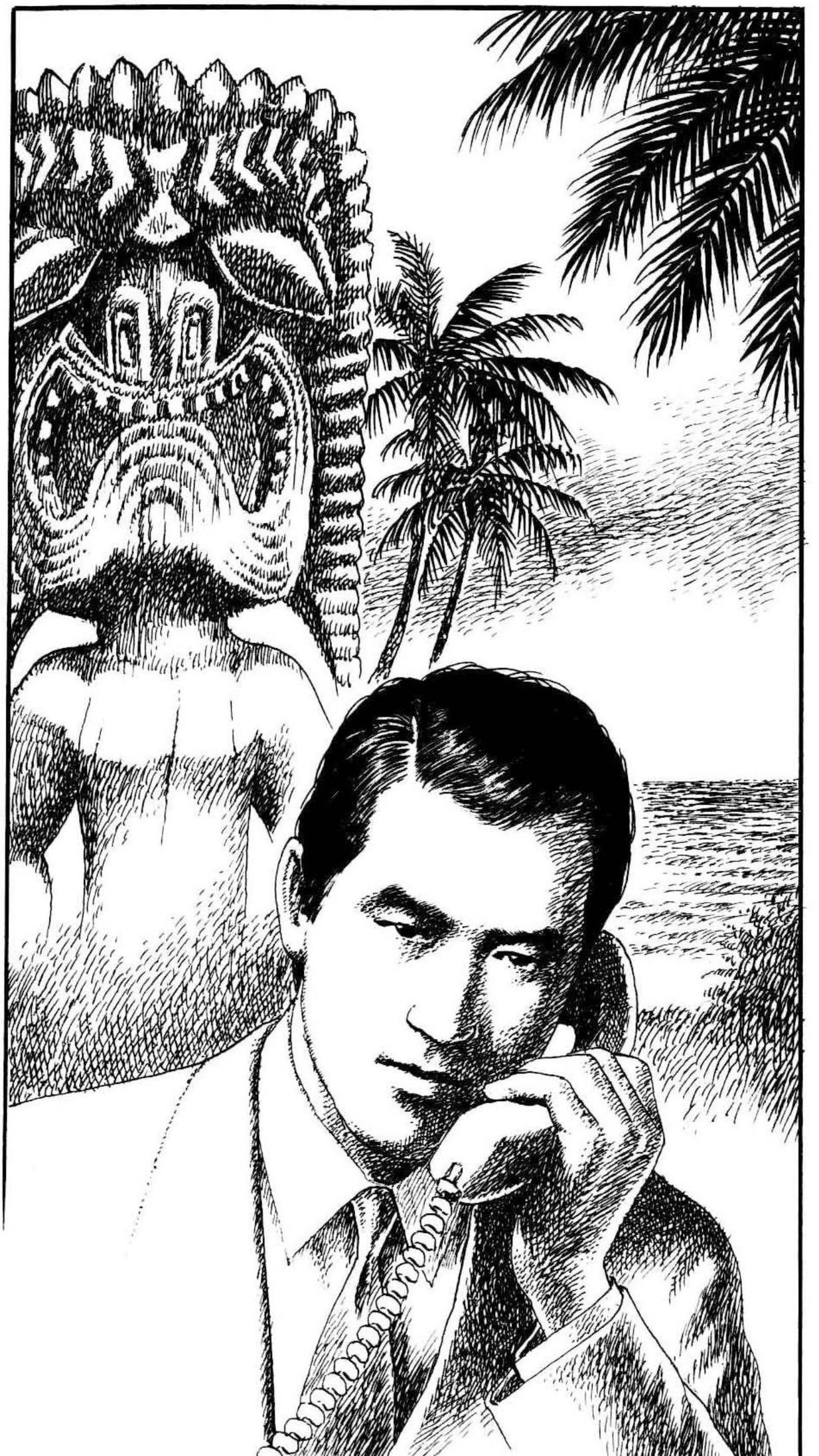
ということであった。

そして、秘伝の妙薬である甲賀流丸薬を出してくれた後、一本の試験管のようなもの……太さは男根相当の、丈夫なガラス製品を与えてくれた。

「あなたは、これを性行為のあと挿入して、仰向けに寝て足を曲げて、一時間くらいじっとしているんです。いいですね？」

この方法によって、甲賀は、不妊に悩む女性を救ってきたのである。

甲賀は、若い頃から、患者に対しては、いつもいい相談相手になってきた。



彼は単なる病院内の医者ではなく、いつも家庭の問題のことまで、なにかと話し相手になった。
「産婦人科医は、総合的な医者でなくてはならない」
というのがモットーなのだ。
そんなわけで、若い頃には、患者の話を聞いて、その秘密を知り、そこから生じる事件の解決にのり出したこともある。
「あの医者は探偵医だ」
という評判が立ったのも当然だった。
そんなわけで、甲賀のために、多くの事件が解決し、警察の手助けになったことも、知る人ぞ知るである。
しかし、八十歳のとき、甲賀は右半身に痺れを感じ、体調を悪くした。
以来、外へはほとんど出ることなく、散歩のとき以外は、自宅か院内に籠(こも)っていて、週に三回だけ、患者の診察をし、相談にのるだけになった。
こうしたキャリアのある甲賀なので、日美子の夫、二階堂警部とも〈女ギャング事件〉のときから、ずっと親しくしており、日美子の健康相談にのったのだった。
だから、日美子が妊娠ときまったとき、甲賀はとても喜んでくれた。
「流産防止に、一番いいのは、出歩かないことですよ。特に階段をのぼりおりするのは、一番ダメです」
という注意もしてくれた。
日美子は、玄米食から、そのほかのことまで、甲賀の注意を、実によく守った。
だからこそ、身籠ったのである。
「あなたは、私の生徒の中で、優等生でしたよ」
と、甲賀は褒(ほ)めてくれた。
甲賀学校の模範生だと認めてくれたことになる。

日美子はそのことも、とても嬉しかった。

4

むろん、日美子の懐妊を、誰よりも喜んでくれたのは、夫の二階堂警部だった。

彼は、電話で、その事実を告げられた日、午後六時頃、手にシャンパンのボトルをさげて帰宅した。

「すまないな。帰って来たといっても、三十分しか、ここにはいられない。すぐに横浜へ行って、張り込みの指揮をとることになっているんだ」

と、彼は、日美子の顔を見るなり言った。

「いいのよ。あなたの気持ちはよく分かるわ……」

そう言って、走り寄った日美子の肩を、二階堂はガッシリした胸と腕で抱きとめてくれた。

「おめでとう。今度こそは、成功させなければね」

と、彼は言った。

「はい」

「じゃ、シャンパンで、乾杯しよう。ほかに何か記念の品を買いたかったが……それはまた後で……」

と、警部はすまなそうに言った。

「いいのよ。私のこの手の中に、赤ちゃんを抱いたとき、その赤ちゃんのために、何か……」

日美子と、警部の二人は、本当に慌ただしく、

「おめでとう」

「嬉しいわ」

と、グラスをあげたのである。

このとき、日美子の妊娠を、心から喜んでくれたもう一人の男がいた。

それは、ハワイの病院に勤務している、日美子の兄の柏木陽一だった。

日美子は、彼のところへ、久しぶりに電話をかけたのである。

「お兄さま。嬉しいことがあるのよ……」

と、彼女は信頼している兄に言った。
すると陽一は反射的に、
「できたか、ベビーが……」
と応えた。
「あら。分かった？」
予言のできる日美子だったが、自分の子供のことを指摘されて、ビックリした。
占い師というのは、自分に密接な事柄の占いは原則として〈しない〉ことになっているのである。これは一般的なルールだ。だからこそ、占者は自分の未来を知らないのである。仮りに知りたければ、自分でやらずに、他人に頼むしかない。しかし、名のある占者は、それを不名誉と考えるために、結局、そのままに終わるのが通例だ。
「分かるとも……、そうか。それはよかったね。大切にしなさい」
「はい」
「今、なんカ月？」
「三カ月よ」
この会話があって、じきに一カ月が経った。今は四カ月である。
五カ月になると、〈岩田帯〉の祝いが待っている。古いしきたりだが、これをしめると、本当に〈母親になるんだわ〉という自覚がでるという。
日美子には、多くの夢があった。結婚生活の楽しみのひとつに、多くの思い出を作るということがある。思い出のためには、写真やビデオを残しておくことがいいのも、知っていた。
日美子の家には、亡き父母が、撮って遺しておいてくれたアルバムが三十冊ほどあった。
カメラ好きの父が、たいていはシャッターをおし、アルバム整理は、母の仕事だった。今でも、それらのアルバムには、母のペンで「私の希望の星」「この笑顔を永遠に……」というふうに書いてあるのだ。

生まれるとき父を亡くし、早くに母を喪った警部は、それを羨ましがった。
「いいな、おまえには……、幼いときの姿が沢山のこっていて……、おれは自分の子供のときのことが、よく分からない」
日美子は、警部の言葉で、自分の幸福を知った。
だから、
〈私の子供にも、私と同じような幸福を与えてあげよう……〉
と心に誓った。
そこで、日美子は、甲賀医師から、
「おめでたですよ」
と言われて間もなく、新しくオートフォーカスの上等なカメラを一台買った。
子供が生まれてからは、ビデオ撮影の方が、動きをキャッチできるから楽しいにちがいない。
十月十日の妊娠中は、カメラでいい。カメラで、セルフタイマーを使って、自分の姿を撮ってみよう……と、そんな計画をたてた。
それから、次に、日美子が考えたのは、子供の名前である。
夫の二階堂の名については、いつも彼から聞かされている。
〈素晴しいことだわ。でも、あのひとのケースは、悲し過ぎる。私は、楽しい名を用意しましょう〉
と、日美子は思った。
自分の名は、よく、他人から、
「耶馬台国の卑弥呼の名をとって、おつけになったものですか？」
と訊かれる。
「いいえ。決してそうではありませんわ」
と応えるが、日美子の名を考えてくれた母の心を思うと、それが嬉しい。
日美子は、男の子の場合、女の子の場合と、二つ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com